



京都に住むM伯父は、とにかく変わっている。

小学校の校長を長く勤め、晩年は京都市町名編纂史をライフワークにしていた。頭脳明晰で学術肌ではあったが、その分理屈っぽくて自信家、そのため、親戚や菩提寺での評判はあまり良くない。

我が家では「五色豆のMさん」で通っていた。一家揃って数日滞在するときも、法事するときですら、持参するのは一箱の五色豆だけだったからである。伯父は連絡もなく、突然一人でふらっと遊びに来ることがある。家人が出かけており、留守番の者しかいなくても、遠慮などせず勝手に上がり込む。そして、

「昼食がまだやさかい、上寿司を頼んでくれへんか」

と寿司屋の出前を要求する。

極めつけは、M家の法事の時の出来事である。

横浜に住む伯父の孫（伯父の二女の息子）が、高校の部活の試合に出場するために、少し早めに戻らねばならなかった。お先に失礼します、と立ち上がったところ、

「こっちへ来なはれ。良いものをやるよって」

と伯父が言う。孫は照れ臭そうに、どうしようか迷った様子でその場に立っていた。伯父の長女の夫が、

「おじいさんが下さるのだから、遠慮せずに頂きなさい」

と助け船を出した。孫はやや恥ずかしそうな表情を見せ、伯父の前に進み出た。伯父は上着のポケットに手を入れ、

「MKタクシーのチケットをやるさかい、京都駅までタクシーに乗って行きなはれ」

小遣いを孫に渡すのだとばかり思っていた親戚一同は、皆啞然。助け船を出した長女の夫の顔は、完全に固まっていた。

ユニークな伯父であるが、子供の頃の私は伯父が大の苦手であった。本当は芸大に行きたかったのだが、家庭の事情で師範学校に進んだ伯父は、音楽が大好きであった。私が遊びに行くと、必ず伯父のピアノ伴奏で文部省唱歌を歌わされる。音痴な私には、苦痛以外の何ものでもなかった。

私が小学校3年生の頃のことである。私の家に遊びに来た伯父は、珍しく五色豆以外に私にお土産を持ってきてくれた。

「なっちゃん、今日はいいい土産を持ってきたで」

伯父は茶色いポストンバッグの中に手を入れて、きれいな紙でくるんだ四角い包みを取り出した。

「ありがとうございます」

お土産を受けとった瞬間、嫌な予感がした。包みを開けると案の定、一冊の本が姿を現した。『でかでか人とちびちび人』

テレビっ子で活発な私は、本が好きではない。

「この本はおもしろいで」

「わあ、可愛い絵。ほんと、おもしろそう。早速読みます。ありがとう」

自分の部屋に戻った私は、ぱらぱらっと中を見ただけで、本箱の奥深くに突っ込んだ。

(なんで本なのお……。もう、だから先生って嫌なんだ)

その後長い間、伯父のお土産は本箱の中で眠ったままであった。しかし本の題名は、中学生になっても、高校生になっても、私の頭の片隅から消え去ることはなかった。その本を再び手に取ったのは、大学生になってからである。

「あえますとも、だって、ぼくらはいつだって、あなたのこころのなかに、いるのですからね。あなたが、ぼくのこころのなかにいるように……。ぼくらだけじゃない、ぼくらのしまも、あなたのこころのなかに、あるのですよ。いつまでも……。あなたが、ぼくらと、ぼくらのしまをすきでいてくれるあいだは……。」

△立花えりか『でかでか人とちびちび人』（昭和五十六年、講談社青い鳥文庫）（p一八〇）▽

大切なもの、愛すべきものは、実は心の中にあるのかもしれないよ、と心優しい冒険物語は私につぶやきかける。しかしこの本の優しさの源に深く入り込むことは、大人になってしまった私には、もはやできなくなっていた。なぜあの時に、伯父からプレゼントされたあの時に、この本を読まなかったのであろうか。悔やまれてならない。

『でかでか人とちびちび人』、今でもこの題名を忘れ去ることはできない。本の魔力としか言いようがないのであるが、本に魔力があることを教えてくれたのは、あの日のM伯父であった。その伯父も、今はもういない。